



Title	「スフィンクス」の光と影 : ミッテラン追悼
Author(s)	高井, 哲彦
Citation	英国ニュースダイジェスト, 522, 14
Issue Date	1996-01-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53042
Type	article
File Information	newsdigest522.pdf



社会主義を实践

一九八一年五月十日、パリ・セーヌ左岸にある英雄廟バンテオンに集まった群衆の前で、ミッテランは真紅のバラを振りかざし、フランス史上初の社会主義大統領の誕生を宣言した。その夜、バスチーユ広場では、変革を叫び熱狂した若者達が一晩中踊り狂ったのだ。

一九九六年一月十日夜、その同じ広場に、一万人もの人々が一輪ずつのバラを手にして集まった。八日早朝、ミッテランは前立腺がんで七十九歳の生涯を終えた。ドゴール將軍と並び、彼ほど戦後フランスに大きな足跡を残した政治家はいなかった。欧州統合もまた彼の情熱なしにはありえなかった。

有化、大型福祉予算、労働時間

振幅の大きい人生だった。極右青年活動家だったミッテランは、第二次大戦で負傷してドイツ軍の捕虜になる。脱出後にナチスの傀儡であるヴィシー政権に身を寄せながら、後に「モーラン」という暗号名で地下活動家として対独レジスタンスに活躍する。そこから彼の戦後の政治活動が開花する。

終戦直後の選挙で国民議會議員に三十歳で当選し、その年から左右両派の内閣の大臣を十一回歴任してひたすら権力への道を駆け昇る。六二年にはライバルを退け社会党の主導権を握り、六五年に野党代表として大統領選挙に挑戦する。そして七四年の敗北を経て八一年、共産党の支持を利用し、三度目の挑戦に上りついに大統領に当選する。八八年の再選を経て、九五年に保守党のシラクに引き継ぐまで、戦後史上最長の十四年間、フランスとヨーロッパの政治・外交を牽引した。

熱狂の中で大統領に就任したミッテランは、大企業

を余儀なくされる。八六年のシラクと九三年のパラデュール両首相は、保守共和共状態（コアビタシオン）で保守党内閣を

出身のテクノクラートの比重が増し、腹心のドグロス・ブル特別顧問やレゴボワ首相が自殺に追い込まれるような汚職醜聞の土壌となった。貧富の格差に効果的な対策が打てず、懸念の失業が逆に倍増したのは、ミッテラン政権中の最大の汚点とされる。移民問題も加わって、従来の社会党支持層であったブルーカラーを、極右の国民戦線に奪われることになった。

欧州統合の立役者

しかし、ミッテランがフランス社会をもっと大きく変えた政治家であることに変わりはない。欧州統合と地方分権は車の両輪であり、統合欧

建設して、二十一世紀に向けてパリの風景を一新した。死刑を廃止し、人種差別に反対し、人権の擁護にも力を入れたが、「フランスは移民の安住の地」とした発言には、足元の社会党からも異議がでた。

核抑止力については、就任後は批判方針を放棄して、昨年のシラクと同様にムルロア諸島での核実験を強行したが、冷戦終結を受けて九二年に核実験の停止を宣言した。冷戦構造崩壊の不安定な時期



ミッテラン追悼

「スフィンクス」の光と影

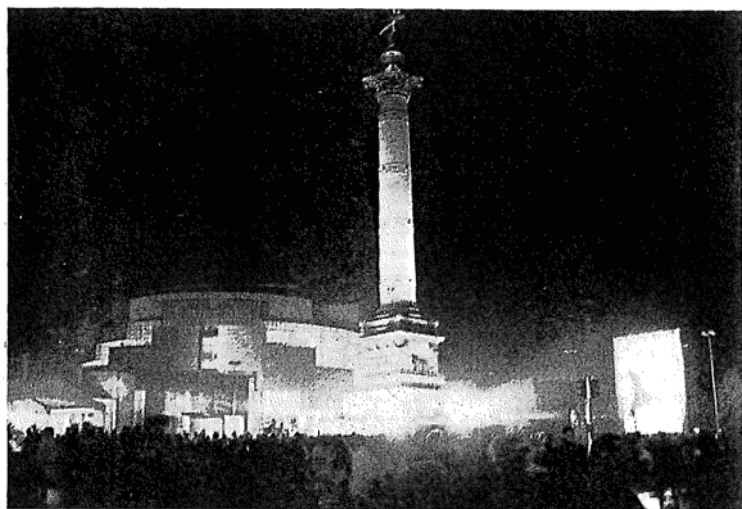
州に国家が権限を委譲する中で、地方の自立性はより強調されることになった。文人政治家のミッテランは、文化予算を倍増させ、ルーヴル美術館の大改造に加え、国立フランス図書館、新凱旋門、シテ・ド・ラ・ミュージック（音楽都市）、ラヴィレレット科学産業都市、新オペラ座等を

ミッテランは、欧州統合に夢の実現をかけた。欧州連邦構想を掲げ、統一ドイツのコール首相と二人三脚で、欧州統合を推進してきた。ドゴール以来の独自戦略を引き継ぎ、米欧中心の世界秩序から距離をおいて、独仏を中軸としたヨーロッパ独自の政治・経済・安全保障を推進した。

に、西側唯一の社会主義政権として、東欧や第三世界に対し理解を示し、米ソの間で第三極として独自の外交を展開した。

威厳と知性にあふれ

テレビ映りのために大齒を



追悼集会が開かれたパリのバスチーユ広場

削り、大志を語る国王のイメージを巧妙に演出した彼だったが、愛する友人や愛人たちのためならば、その作り上げたイメージが傷つくことも厭わなかった。九四年に親ナチスのペタン元帥の心酔者であったことを明らかにしたときも、九五年に隠し子の存在を暴露されたときも、悪びれることなく事実を認めた。汚職事件を引き起こした実業家ブラやヴィシー政府警察長官のフスケとの友情は、彼らが罪に問われるようになってからも終生変わらなかった。常に時計を所持し、先進国首脳サミットにも遅刻してしまう大器ぶりを人々は「トントントン（おじさん）」と呼んで敬愛した。

ミッテランの演説は常に威厳と知性にあふれ、壮大な夢と雄弁に国民は酔った。彼の夢の多くははじけかかなかった。その社会主義も社会民主主義的な現実路線に大きく変質し、晩年の彼は老獪な「スフィンクス」とも呼ばれた。

しかし、人間と社会の理想を語る数少ない政治家だった。真紅のバラを握りしめたコブシがミッテラン社会党のシンボルだった。彼にとって政治は夢であり華だったのである。